

補語、補語構文の構築

馮 蘊 澤

【要旨】 形式構造において、述語動詞の後続成分のうち、目的語成分以外に二つの形式成分がある。一つは目的語の前に位置し、数量詞（または名詞）によって担われる成分で、もう一つは目的語の後に位置し、動詞性フレーズによって担われる成分である。前者は意味成分の〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉に対応し、後者は意味成分の〈程度〉に対応する。形式成分として前者を「補語Ⅰ」と呼び、後者を「補語Ⅱ」と呼ぶことにして、中国語構文の基本的形式構造は「主語＋状語＋述語＋補語Ⅰ＋目的語＋補語Ⅱ」として述べられる。意味構造上の意味成分が形式構造上の形式成分との対応関係に基づいて形式成分に導入され、意味と形式の結合体としての基本的構文構造が構築される。基本的構文構造は表層上の制約と語用論等の要請を受け、いくつか変形を経て、表層の構文構造となる。

1. 始めに

1.1 「補語」と呼ばれる成分

文の表層構造を対象とする伝統的中国語構文分析では、文の直接構成成分を表す概念の一つに「補語」がある。伝統的に用いられてきた補語の概念は大方次の例のなかの角括弧で示している要素を指す。(文例は劉・潘・故1983による。)

- (1) a. 我们一定能救[活]他。
b. 老师交[给我]一把钥匙。

- c. 我的话你们听[得][懂]吗?
- d. 孩子们排着队走[出]了校门。
- e. 昨天我找过[两次]老师。
- f. 他在路上走了整整[三天]。
- g. 小明写字写得[笔尖都秃了]。
- h. 他唱歌儿唱得[很好]。

上のように認定される「補語」成分についてのこれまでの記述は主としてその「類型」の整理に関心が集中してきた。類型整理の視点は主に「意味類型」の視点と、「統語範疇類型」の視点の二つある。その代表的な（あるいはより多くの類型を提示した）例として、意味類型のモデルには劉・潘・故1983が、統語範疇類型のモデルには錢1995がある。以下、それぞれ(2)と(3)に示しておく。

(2) 意味類型（劉・潘・故1983）

- 1. 【結果補語】：a. 我们一定能救[活]他。（動詞性結果補語）
b. 老师交[给我]一把钥匙。（前置詞フレーズ結果補語）
- 2. 【可能補語】：我的话你们听[得][懂]吗？
- 3. 【趨向補語】：孩子们排着队走[出]了校门。
- 4. 【数量補語】：a. 昨天我找过[两次]老师。
b. 昨天我找过老师[两次]。 / 小马等了你[两个多小时]。
c. 昨天我找老师找过[两次]。 / 小马等你等了[两个多小时]。
- 5. 【様態補語】：小明写字写得[笔尖都秃了]。
他唱歌儿唱得[很好]。

(3) 統語範疇類型（錢1995）

- 1. 【形容詞】：喝酒喝得[多]了。 / 这纸上写得[清清楚楚]。
- 2. 【動詞】：你不能把女儿带[走]。 / 把小孩儿吓[哭]了。

3. 【趨向詞】：人们陆续退〔出〕了会场。/ 一到三月，天气就渐渐暖和了〔起来〕。
4. 【方位詞】：你把暖瓶搁〔地上〕。
5. 【前置詞フレーズ】：老师把生词写〔在黑板上〕。/ 这部小说发表〔于1921年〕。
6. 【代詞】：去看看他现在过得〔怎么样〕了。
7. 【数量詞】：多练几遍。这楼房已经整修过〔两次〕了。
8. 【主述フレーズ】：他的这番话逗得〔大家哈哈大笑〕。/ 暖风吹得〔游人醉〕。
9. 【連合フレーズ】：这事情把我搞得〔哭也不是笑也不是〕。
10. 【動目フレーズ】：感动得〔掉下了眼泪〕。/ 他被接连而三的失败打击得〔丧失了信心〕。
11. 【偏正フレーズ】：我小侄儿学话学得〔很快〕。/ 张明跑得〔比李刚慢〕。
12. 【述補フレーズ】：我今天吃得〔多了点儿〕。
13. 【期間】：这件毛衣姐姐已经织了〔一个星期了〕。
14. 【「ようだ」フレーズ】：他的手掌大得〔象蒲扇似的〕。
15. 【固定フレーズ】：小王被问得〔莫名其妙〕。

ほかに、「意味」と統語範疇類型、及び形式の視点が混在する類型化も散見される。李1993は、「数量補語文」、「方向補語文」、「結果補語文」に加えて、「得」字補語文、「个」補語文を提示している。また、北京大学1993も、「結果、趨向、可能、程度」のほかに、「前置詞フレーズ補語」を挙げており、ユニークである。

1.2 先行研究と課題

上記のような分析と記述にいくつか問題がある。大きく、補語成分の定義の問題と、補語とされる成分の下位分類の問題の2つに整理できる。

まず、「補語」成分の定義について考える。これにはさらに以下の二つの問題がある。

一つは、意味成分との対応関係の問題である。意味成分と形式成分の対応関係の詳細については、この後の1.3節で述べるが、同じ「補語」と呼ばれる成分の

なかで、「前置詞フレーズ結果補語」、「数量補語」、「様態補語」は意味成分の〈着点〉、〈数量〉、〈程度〉に対応する形式成分で、「動詞性結果補語」、「趨向補語」、「可能補語」は意味成分の〈事態〉に対応する成分である。〈着点〉、〈数量〉、〈程度〉は意味構造上では従属成分で、これらの意味成分に対応する形式成分を「主語」や「目的語」と並んで、「補語」と定義することが可能であるものの、〈事態〉成分は意味構造上の主要成分である。補語構文以外では、事態成分が実現する形式成分の「述語」とされるのに対して、補語構文においてのみ、事態成分に対応する形式成分は従属成分に対応する他の成分とともに、「動詞性結果補語」、「趨向補語」、「可能補語」のように、「主語」や「目的語」と同列の「補語」と解釈されている。形式成分類型認定が恣意的で、全体としての整合性、首尾一貫性に欠けていることが分かる。

補語の定義に関する問題のもう一つは構造的位置である。次の例が示すように、「補語」とされる成分は述語と目的語の間に配置されるもの(i)もあれば、目的語のさらに後の位置に配置されるもの(ii)もあり、さらに述語動詞の反復を伴って文末に配置されるもの(iii)もある。

- (4) i. 目的語の前： 老师交[给我] 一把钥匙。
ii. 目的語の後： 小马等了你[两个多小时]。
iii. 述語動詞反復型・目的語の後： 小明写字写得 [笔尖都秃了]。

つまり、主語、目的語など、他の形式成分の構造的位置が相対的に安定しているのに対して、補語成分の構造的配置だけが不安定で、不明確である。事実上、述語成分に後続する形式成分のなかで、目的語以外の成分を、その構造的位置、及び統合範疇類型の如何に関わらず、まとめて「補語」と呼んでいるに過ぎない。従って、伝統的記述に基づいて「補語」成分を定義しようとする場合、「補語」とは、「述語成分の後に配置される成分のうち、目的語以外の成分」と述べる以外方法はない。このため、補語成分の定義が曖昧で、厳密性に欠ける。

次に、「補語」成分の下位分類について考える。

補語成分はそれ自身の「意味」によって、「結果」、「可能」、「趨向」、「数量」、「様態」と分類されているが、そのうち、「結果」と「数量」は当該成分の述語動詞（つまり「事態」成分）との意味関係によって定義されているものである。よって、構文成分が文中で担う「意味役割」と解釈できるが、「様態」とは当該成分を担う言語単位が持つ語彙の意味である。さらに、「可能」、「趨向」とはむしろ述語動詞によって担われる主要成分である事態の種類のことである。このため、補語の「意味」とは、当該成分を担う要素の語彙の意味を指すものか、あるいは述語動詞が担う事態成分との意味関係によって定義される意味役割を指すものか、さらに事態成分自体の種類のどうか、不明確である。「意味」に基づく下位分類も恣意的で、体系としての整合性、首尾一貫性に欠ける。

さらに、補語成分に関する情報の一つに統語範疇類型がある。統語範疇類型の認定も表層の事実にこだわり、基準が恣意的である点が随所見られる。例えば、「你把暖瓶搁地上。」と「你把暖瓶搁在地上。」とでは、明らかに前者は後者の変異体で、抽象的な記述レベルでは両者は同一の形式構造であるにもかかわらず、銭1995は前者の「你把暖瓶搁地上。」における補語成分は「地上」とし、後者の「老师把生词写在黑板上。」の補語成分は「在黑板上」としている。このため、前者は「方位詞」で、後者は「前置詞フレーズ」となる。よって、補語を担う要素は「前置詞フレーズ」のほかに、「方位詞」も含まれることになる。また、「这楼房已经整修过两次了。」のなかの「两次」と、「这件毛衣姐姐已经织了一个星期了。」の「一个星期」はいずれも「数量詞」であるにもかかわらず、前者は「数量詞」、後者は「期間」とされる。「数量詞」と「期間」は対立する関係にある概念ではなく、抽象化の余地が残ることは明らかである。ほかに、「他的这番话逗得大家哈哈大笑。」、「这事情把我搞得哭也不是笑也不是。」、「他被接连而三的失败打击得丧失了信心。」のような例に関しては、より抽象的記述レベルではいずれも「他的这番话逗得大家哈哈大笑。」、「这事情把我搞得(我)哭也不是笑也不是。」、「他被接连而三的失败打击得(他)丧失了信心。」のように、補語を

担うのは「動詞性フレーズ」の一つに集約されるにもかかわらず、表層的事実に留まる従来の記述ではそれぞれ「主述フレーズ」、「連合フレーズ」、「動目フレーズ」となる。このため、「補語」成分を担う要素の統語範疇類型は15種類にも上り、恣意的解釈か、単なる表層的事実の羅列である。ここにも類型化する基準が恣意的で、整合性、首尾一貫性に欠ける面が窺える。

このように、従来「補語」と呼ばれる成分は、述語動詞の後に現れる要素のうち、目的語と解釈できない要素を便宜的に一つにまとめたカテゴリーで、その統語的位置も、統語範疇も曖昧で、また、意味成分との対応関係も不明確である。このような分類は単なる分類のための分類で、「適格な文のみ生成し、不適格な文を排除する」ことを可能にする「言語知識」の解明には寄与しないことは明らかである。

1.3 理論的背景

言語の記述には大きく二つの立場がある。一つは表面の言語事実を可能な限り集め、なんらかの基準に基づいて類型化し、逐一列挙する立場である。こうした分析は表面的事実の提示が目的で、同じ事実をさまざまな視点から類型化し、列挙することに始終し、言語話者が内的に持っている言語知識の解明には無関心である。もう一つの立場は、表面的事実の観察を通じて、言語話者が内的に持っている言語知識（または「言語能力」）を抽象化の作業を経て、理論的に説明しようとする立場である。言語知識とは、文について言えば、言語話者が内的に持っている文構築に関する知識のことである。言語の分節的特徴から、文はより小さい単位を用いて構築されるものと思われる。このため、言語話者が内的に持っている言語知識の一種である文構築の知識の記述は、最終的には文がより小さい単位から構築されるメカニズム及びそのプロセスの説明となる。

本稿は後者の立場である。

従来、「補語」と呼ばれる要素は、「述語、主語、目的語、状語」と呼ばれる要素と並んで、表層の構文構造を対象にした分析から得られる構文成分の概念とし

て用いられてきた。こうした構文成分の概念には、形式に関する情報と意味に関する情報の両方が含まれているとされる。形式に関する情報とは、構文成分の構造的な位置やそれを担う成分の統語範疇に関する情報のことで、意味に関する情報とは、当該成分が担う意味役割のことである。

ところが、こうした概念が持つと考えられる形式と意味の二種類の情報のうち、形式に関する情報は相対的に安定しているのに対して、意味役割に関する情報は文によって（正確に言えば述語が表す「事態」の種類によって）必ずしも同じではない。例えば、同じ「主語」を例にして観察すると、〈動作者〉を表す文もあれば、〈対象〉を表す文や、〈場所〉を表す文もある。つまり、構文成分の形式類型と意味役割類型は非対称性関係にあるということである。

構文成分の形式類型と意味役割類型のこうした非対称性関係の事実は構文成分の形式と意味が別々に規定されていることを示唆する。構文成分の形式を規定するのは形式成分からなる「形式構造」で、意味役割を規定するのは意味成分からなる「意味構造」である。意味構造上の意味成分と形式構造上の形式成分の間に一定の対応関係があると考えられ、このような対応関係に基づいて、意味構造上の意味成分が形式構造上の形式成分に導入され、両者が結合することによって、構文成分が実現し、意味と形式の結合である「構文構造」が構築される。他方、一つの言語において、形式構造が1つであるのに対して、意味構造のほうは、主要成分である「事態」の種類によってその数も類型も同じではない。このため、同一の形式成分に対応する意味成分も文によって異なり、このことが構文成分の形式と意味が非対称性関係を呈する理由である。

上記の理由によって、文構築メカニズムの解明とプロセスの説明を目標とする言語の記述では、具体的に次の三つのことが課題となる。一つは当該言語における文の形式構造の解明で、もう一つは意味成分と形式成分の対応関係の情報を含めた個々の文の意味構造の記述、そして三つ目は表層の構文構造における変形の説明である。

文の形式構造とは、形式構造を構成する形式成分の数と類型、及び個々の形式

成分類型の形式に関する規定である。また、形式成分の類型に関する規定とは具体的にはさらに形式成分の「構造的位置」と「統語範疇」に関する情報のことである。形式構造は文の形式的適格性を保障する。「補語」を含めて、従来、意味と形式の両方の情報が含まれるとされる構文成分の類型である「述語、主語、目的語、状語」といった概念は、それ自身の形式類型と意味役割類型の非対称性関係、つまり、形式に関する情報の安定性と、意味役割類型に関する情報の多様性と不安定性特徴から、事実上形式構造上の形式成分を表す概念に過ぎないとするのが適切である。本稿も以下、これらの概念を単なる形式成分を表す概念として用いる。そして、文に最大限に含まれる形式成分の数と類型、及びそれぞれの形式成分類型の形式に関する規定を明らかにすることによって、形式成分からなる文の形式構造も自ずと明らかになる。

適格な文は形式的適格性のほかに、意味的適格性も要求される。文は意味の観点から見れば、意味成分からなる意味単位で、意味成分の構造である。文には最低限2つの意味成分が含まれる。形式成分としての「述語」や、「主語、目的語、状語、補語」は一定の意味成分が形式として実現するための装置で、故に形式成分である。前述のように、意味成分は類型ごとに一定の形式成分との間で対応関係が定められており、こうした対応関係に基づいて意味成分と結合して、構文成分が実現し、構文構造が構築されるものである。よって、意味単位としての具体的な文に含まれる意味成分の数と類型のほかに、意味成分類型と形式成分類型の対応関係も文構築メカニズムの解明を目的とする文記述の課題である。他方、文によって、主要成分である事態成分の類型が同じではないため、同一の形式成分に対応する意味役割も同じとは限らないので、意味成分と形式成分の対応関係の情報は、意味構造の内部において、意味成分の類型とともに言語知識の一部として記載されていると考えるのが適切である。このため、文構築のプロセスを説明するにあたって、意味成分と形式成分の対応関係の情報を含めた個々の文の意味構造を明示的に示す必要がある。本稿の対象である補語成分について言えば、形式成分としての補語成分に、それぞれの文の意味構造のなかでどのような意味成

分が対応するかを明らかにすることである。

同一の意味構造を持つ文は表層においていくつかの異なる形式で現れることがある。いわゆる「同義異形文」の存在はこのためである。この点、本稿の対象である補語成分を含む文も例外ではない。前にすでに見たように、補語成分は目的語の前に現れるものもあれば、目的語の後に現れるものもあり、さらに述語動詞反復形で実現することや、補語成分に前置詞や助詞「得」などの機能語を要求するときもある。文構築メカニズムとプロセスの説明を目的とする文の記述は、こうした表層構文構造の多様性についても説明しなければならない。表層構文構造の多様性は構文構造における形式成分類型表示、意味役割表示などの構文構造自身の制約をはじめ、情報の新旧、焦点のあり方など、情報のあり方によって条件付けられているものもある。このため、表層構文構造の多様性を動機づけるこれらの条件を解明し、基本的構文構造からの変形を規定する変形規則を提示することも課題の一つである。

以上述べた点を踏まえて、本稿が考える文構築のメカニズム及びそのプロセスは概略的に次のように図示することができる。

(5) 意味構造類型 A

意味構造類型 B ———→ 形式構造

意味構造類型 C

.....



基本的（深層）構文構造

変形規則

表層構文構造 a

表層構文構造 b

.....

1.4 構成

本稿は以下のように構成される。次の第2節では、従来一概に「補語」と呼ばれる要素を従属成分に対応する本来の意味の「補語成分」と、主要成分の「事態」に対応する「述語成分」に区別したうえ、従属成分に対応する本来の意味の補語成分については、その意味役割類型に基づいて、対応する意味成分の類型が4つあるとして、それぞれ〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉、〈程度〉であることを明らかにする。続いての第3節では、〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉、〈程度〉のそれぞれに対応する形式成分の形式特徴を分析し、これに基づいて、いわゆる「補語」成分には「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」の違いがあり、両者の構造的位置も、統語範疇類型も異なることを示し、二種類の「補語」を含む文の基本的形式構造を提示する。第4節ではそれぞれ「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」として実現する意味成分を含む文の意味構造類型と、意味成分が形式成分に導入されるプロセスを提示し、意味構造から基本的構文構造が形成されるメカニズムを明らかにする。さらに、形式構造の制約と、語用論的要請によって基本的構文構造に変形が起き、唯一の基本的形式構造から多様な表層形式構造が生成されるメカニズムとそのプロセスを示す。

2. 「補語」の意味成分類型

2.1 従属成分の実現である「補語成分」と事態成分の実現である「述語成分」

前述のように、これまで同じく「補語」と呼ばれてきた成分にはいくつかの類型があり、これらの「補語」類型は互いに統語範疇類型も、意味役割類型も、さらに構造的位置さえ異なることがある。このため、「補語」という一つのカテゴリでまとめることが適切かどうか、再検討する必要がある。この節では、従来「補語」と呼ばれる成分のそれぞれが対応する意味成分の類型を精査し、実際、意味構造上の従属成分に対応するものと主要成分である「事態成分」に対応するものの2種類があることを明らかにする。また、この節での分析をふまえて、次節では従来「補語成分」と呼ばれる要素を本来の意味の「補語成分」と「述語成分」に区別し、再定義する。

2.2 「結果補語」：従属成分の実現である「前置詞フレーズ結果補語」と事態成分の実現である「動詞性結果補語」

上掲例(2)が示しているように、従来「結果補語」と呼ばれる成分は、形式上「前置詞フレーズ結果補語」によって担われるもの（「老师交[给我]一把钥匙。」）と、「動詞性結果補語」によって担われるもの（「我们一定能救[活]他。」）の二種類がある^(※1)。明らかに、前者は従属成分に対応する形式成分で、後者は事態成分に対応する形式成分である。（なお、前者の「前置詞フレーズ結果補語」における「前置詞」の概念については、現代中国語の前置詞は歴史的に動詞から変化してきたものが多く、よって、形式上の振る舞いは動詞と前置詞の間を遊離することがある事実は周知の通りである。このため、典型的な前置詞言語における「前置詞」の性格とは幾分異なり、本来は「前置詞的要素」と呼ぶべきもののだが、行文の便宜上、以下「前置詞」と略す。）

(1) 従属成分の実現である「前置詞フレーズ結果補語」

「前置詞フレーズ結果補語」の「意味」は、当該成分を担う要素の語彙の意味から、それぞれ「場所、時間、相手」として下位類型化することも可能だが、述語動詞が担う事態成分との意味関係からは、同じく〈着点〉として類型化することができる。以下、意味構造上の相対的上位の意味成分カテゴリーの一つとして、〈着点〉成分と呼ぶことにする。

- | | |
|--------------------------|------------|
| (6) 他+放+[(在)桌子上]+一本书。 | 補語：〈着点・場所〉 |
| (7) 昨天+我们+一直+唠+[(到)了天亮]。 | 補語：〈着点・時間〉 |
| (8) 他+顺手+递+[(给)我]+一个苹果。 | 補語：〈着点・相手〉 |

〈着点〉の意味役割は、これを担う要素が持つ語彙の意味（あるいは辞書の意味）ではなく、当該要素が構文に参加することによってその文の主要成分である事態成分との間で新たに生じる相対の意味関係である。従って、意味構造において、〈着点〉は従属成分の一つである。当該成分を含む意味構造は次のように示

される。

- (9) { 他 (名) 〈主体・動作者〉
放 { 桌子上 (名) 〈参与体・着点〉
 { 一本書 (名) 〈客体・被動作者〉

他方、形式構造では、〈着点〉成分の現れ方は次の2つある。基本的には次の(10)のように述語動詞と目的語の間に現れるが、一部は(11)のように、述語動詞の反復を伴い、目的語の後に現れることもある。

- (10) 主語 + 状語 + 述語 + 〈着点〉 + 目的語

他 放 [(在)桌子上] 一本書。

他们 送 [(到)机场] 几个客人。

- (11) 主語 + 状語 + 述語 + 目的語 + 述語 + 〈着点〉

他们 送 客人 (一直) 送 [(到)机场]。

(2) 事態成分の実現である「動詞性結果補語」

いわゆる「動詞性結果補語」文には2つの動詞性成分(V1+V2)が含まれる。従来分析ではV1は述語、V2は「補語」とされる。V2を「補語」とする根拠はV1とV2の「意味的相違」とされる。つまり、二つある動詞性成分V1とV2のうち、V1は「行為」を表し、V2はV1によって誘発される「結果」を表すとされる。よって、V1が述語で、V2はV1に対する「補語」であり、「結果補語」であるという。

ここでは二つのことを確認したい。まず、V2は必ずしもすべてV1の「結果」ではない。次の(12)、(13)はいずれも「動詞性結果補語」を含む文である。(12)の例ではV2はV1の結果と解釈されうが、(13)の各例では、V2は必ずしもV1の結果と解釈できない。

- (12) 我们一定能救[活]他。
我明天能写[完]这篇报告。
- (13) 他睡[醒]了。
你说[对]了。
我走[过头]了。

次に、意味構造のなかで、従属成分は事態成分との間で何等かの意味関係で結ばれ、従属成分を担う要素はこのように事態成分との間で何等かの意味関係が生じることによって構文の一成分となり、従属成分の意味役割類型も事態成分との意味関係によって定められる。故に、事態成分は主要成分で、他の成分は従属成分である。

いわゆる「動詞性結果補語」構文では、従属成分の意味役割はV1とV2の両方との意味関係で定められる。このことを端的に示すのはこのタイプの文における目的語成分の意味役割である。上に挙げた(12)にある「我们一定能救活他。」の文を例に観察すると、次の(14)が示すように、目的語の「他」は、一方では述語とされるV1「救」が表す「行為」の事態に対して「客体・被動作者」の意味関係にあり、他方では補語とされるV2「活」が表す「状態」の事態に対しても「主体・対象」の意味関係にある。

- (14) 我们+一定能+救+[活]+他。
- └───┐
└───┘ 〈主体・対象〉

└───┐
└───┘ 〈客体・被動作者〉

このように、従属成分の実現である目的語の意味役割がV1+V2（「救+活」）

の両方が表す事態のそれぞれとの意味関係によって定められている以上、意味構造におけるこの文の事態成分はV1だけではなく、V1+V2全体であると考えなければならない。つまり、V2は事態成分に対応する形式成分であって、従属成分に対応する形式成分ではない、よって「前置詞フレーズ結果補語」と同列のものではない。実際、このタイプの文のなかで、V1+V2は全体で「使役動詞」(または「達成述語」として機能する。現代中国語では、かつて豊富にあった「使役動詞」^(*)2)が衰退し、代わりにV1+V2の間に「行為」と「結果」の役割分担がある(12)タイプのV1+V2が発達し、事実上使役動詞(または使役述語)として機能するようになってきた経緯がある。特に、「他做完了作业了。」のような文が示すように、二つの動詞成分の主体が同一指示関係にない場合、文の使役性の意味が一層鮮明である。

以上、「動詞性結果補語」文のなかで事態成分を担うのはV1+V2全体であることを述べたが、さらに、V1を担う動詞の類型によっては、文の主要意味成分である「事態」の主たる担い手はむしろV2の方で、述語とされるV1は事実上形式的な存在であることさえある。上に挙げた(13)の各文はこのタイプの例である。これらの文のなかで事態成分を担うのはそれぞれV2として実現する「醒」、「対」、「过头」の方であって、V1の「睡」、「说」、「走」ではないことは明らかである。

このように、形式構造上V2はV1と同様、事態成分の実現である。上記の考え方に基づくV1+V2構文の意味構造は次の(15)のように表示される。そして、形式構造ではV2は常にV1のすぐ後に現れ、形式構造は次の(16)のようになる。(形式成分としてのV2の性格については、次の第3節で取り上げる。)

- (15)
- | | | |
|-------|---|---------------|
| V1+V2 | $\left\{ \begin{array}{l} \text{救} \\ \text{活} \end{array} \right.$ | 我们(名)〈主体・動作者〉 |
| | | 他(名)〈客体・被動作者〉 |
| | | 他(名)〈主体・対象〉 |
| | | |

(16) 主語 + 状語 + V1+[V2]+目的語

我们 一定能 救 [活] 他

2.3 従属成分の実現である数量補語、趨向補語、様態補語

(1) 従属成分の実現である「数量補語」

「数量補語」と呼ばれる成分は通常「数量詞」によって担われ、文中で担う意味役割は〈数量〉である。「数量補語」が担う〈数量〉の意味役割は当該成分を担う言語単位が固有の語彙的（辞書的）意味ではなく、当該言語単位が構文に参加することによって、主要成分である事態成分との間で新たに生じるもので、事態成分との意味関係によって定められるものである。従って、意味構造では従属成分の一つで、〈数量成分〉と呼ぶことができる。数量補語を含む文の意味構造次のように示すことができる。

(17) $\left\{ \begin{array}{l} \text{我们(名)} \langle \text{主体・動作者} \rangle \\ \text{找} \left\{ \begin{array}{l} \text{老师(名)} \langle \text{客体・被動作者} \rangle \\ \text{两次(数)} \langle \text{参与体・数量} \rangle \end{array} \right. \end{array} \right.$

(18) $\left\{ \begin{array}{l} \text{我(名)} \langle \text{主体・動作者} \rangle \\ \text{学} \left\{ \begin{array}{l} \text{汉语(名)} \langle \text{客体・被動作者} \rangle \\ \text{三年(数)} \langle \text{参与体・数量} \rangle \end{array} \right. \end{array} \right.$

形式構造では、〈数量〉成分は基本的に次の(19)のように、述語動詞と目的語の間に現れる。一部は(20)のように目的語の後に現れることもある。さらに、(21)のように、述語動詞の反復を伴って目的語の後に現れることもある。

(19) 主語 + 状語 + 述語 + 〈数量〉 + 目的語

我们 找过 [两次] 老师。

我 学过 [三年] 汉语。

(20) 主語＋状語＋述語＋目的語＋〈数量〉

小马 等了 你 [两个多小时]。

我们 找过 老师 [两次]。

(21) 主語＋状語＋述語＋目的語＋述語＋〈数量〉

小马 等 你 等了 [两个多小时]。

我们 找 老师 找过 [两次]。

(2) 従属成分の実現である「趨向補語」

いわゆる「趨向補語」の「進、出」及び「上、下」については、少なくとも意味的に後続する名詞成分が顕在、または潜在的に存在することと、「進、出」の存在はこの顕在、または潜在する名詞成分によって要求され、共起することから、「進、出」及び「上、下」も同じ前置詞的要素で、「進＋N」、「出＋N」、「上＋N、下＋N」のように、後続する名詞成分と前置詞フレーズを構成し、前置詞フレーズ補語の一種であると考える。

(22) a. 他走。

b. 他走[(進)校门]。

c. 他走[(出)校门]。

d. ? 他走[(進)]。

e. ? 他走[(出)]。

この場合、「上＋N、下＋N」のなかのNの意味成分類型は同じ〈着点〉であると理解する。他方、「進＋N、出＋N」のなかのNの意味成分類型は、上の(22)の例で分かるように、〈着点〉とは幾分異なり、ここでは〈通過点〉とすること

ができる。

ただし、表層の構文構造上、話し手との相対的位置関係を示す助詞「来、去」が伴う場合、次のように、前置詞を要求する本体である名詞成分自身が顕在しないことがあることについても言及しなければならない。

- (23) a. 他们走[(进)]来了。
b. 他们走[(出)]去了。

これは、助詞「来、去」との共起によって、移動の方向性が明示的に示され、意味成分を表す名詞成分本体が省略可能であるという形式構造上の規則が中国語に存在することを示すものと考ええる。さらに、「过来」、「起来」のように、助詞「来」との共起が基本的で、よって移動の方向性が常に明示的である「过、起」も同じ「前置詞的要素」とであると考ええる。上記のように、前置詞を要求する本体である名詞成分自身が非顕在で、形式構造上前置詞的要素のみ残るという現象は、典型的な前置詞言語から見た場合、矛盾しているようにも見えるが、前述のように、現代中国語のいわゆる「前置詞的要素」は、歴史的には動詞から変化してきたものが多く、形式上におけるその振る舞いもまだ不安定で、動詞と前置詞の間を遊離する側面がある。

(3) 従属成分の実現である「様態補語」

「様態補語」と呼ばれる成分は表層構造上動詞性フレーズ(N+V, またはV)によって担われる。他方、「様態補語」が文中で担う意味役割についてのこれまでの議論は多岐にわたり、現在、共通の認識に至っているとは言えない。意味の問題は本稿の主たる目的ではなく、今後、より説得力のある研究の登場が待たれる。ここでは便宜的に〈程度〉成分と呼ぶことにする。〈程度〉成分を含む文の意味構造は次のようになる。

- (24) 写 { 小明(名) 〈主体・動作者〉
字(名) 〈客体・被動作者〉
笔尖秃了(VP) 〈参与者・程度〉

- (25) 唱 { 他(名) 〈主体・動作者〉
歌儿(名) 〈客体・被動作者〉
很好(VP) 〈参与者・程度〉

形式構造について、〈程度〉成分は次の(26)のように、述語動詞の反復を伴って目的語の後に現れる。

- (26) 主語＋状語＋述語＋補語 I ＋目的語＋述語＋ 〈程度〉
小明 写 字 写(得) [笔尖都秃了]。
他 唱 歌儿 唱(得) [很好]。

2.4 事態成分の実現である可能補語

いわゆる「可能補語」とは、本来は「動詞性結果補語」に含まれる二つの動詞性成分V1とV2の間に助詞「得/不」が挿入される形式であることからわかるように、二つの動詞性成分(V1＋V2)を含む点と、主語、目的語などが担う従属成分の意味役割がV1とV2の両方との意味関係で定められる点で、前述の「動詞性結果補語」と同じである。助詞が加わっていることで、事態類型は「達成可能」となっていることで「動詞性結果補語」と区別されるが、「動詞性結果補語」の変化形として理解される。意味構造と形式構造の実現はそれぞれ次の(27)、(28)のように示される。^(※3)

- (27)
- $$V1 + DE/BU + V2 \left\{ \begin{array}{l} \text{拿(V1)} \left\{ \begin{array}{l} \text{他(名) 〈主体・動作者〉} \\ \text{这个箱子(名) 〈客体・被動作者〉} \end{array} \right. \\ \text{动(V2)} \left\{ \begin{array}{l} \text{这个箱子(名) 〈主体・対象〉} \\ \text{.....} \end{array} \right. \end{array} \right.$$

- (28) 主語 + 状語 + V1+[DE/BU]+V2 + 目的語
- 我 拿 [得/不] 动 这个箱子。
- 我 写 [不/不] 完 这篇论文。

2.5 小結：事態成分の実現と従属成分の実現

この節の分析で、従来、ともに「補語」と呼ばれる「前置詞フレーズ結果補語」、「数量補語」、「様態補語」、「動詞性結果補語」、「趨向補語」、「可能補語」は、意味成分類型との対応関係は同じではなく、「前置詞フレーズ結果補語」、「数量補語」、「趨向補語」、「様態補語」はそれぞれ従属成分の〈着点〉、〈数量〉、〈通過点〉、〈程度〉成分の実現で、「動詞性結果補語」、「可能補語」は主要成分の〈事態〉成分の実現である。補語とは、形式構造を構成する形式成分の概念である。形式成分の類型は、構造的位置、統語範疇類型、及び本節で分析してきた意味成分との対応関係の三つの情報によって定義される。次節では、これらの情報に基づいて、これらの成分は従来の分析のように形式成分として同じ「補語」として認定することが適切か否かについて考える。

3. 補語成分の形式に関する規定、文の基本的形式構造

3.1 補語成分と述語成分、補語成分の類型

上では、従来同じく「補語」と呼ばれる形式成分には、意味構造上の従属成分（〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉、〈程度〉）に対応するものと、主要成分（〈事態〉成分）に対応するものの2種類があることを見た。従属成分に対応する形式成分は形式構造上「主語」や「目的語」などの成分と並んで、「補語」と認定すること

が可能であるものの、主要成分の事態成分に対応する形式成分は同じ意味で「補語」と呼ぶことが適切かどうかは、形式構造分析に関する課題の一つである。他方、形式構造において「補語」と呼ばれる形式成分の構造的位置が2つあり、〈数量〉成分、〈着点〉成分、〈通過点〉成分が現れる位置と、〈程度〉成分が現れる位置が異なり、前者は基本的に述語動詞と目的語の間に現れるのに対して、後者は基本的に述語動詞の反復及び助詞「得」の添加を伴って、目的語の後に現れる。対応する意味成分の類型の異同はともかくとして、構造的位置も、統語範疇類型も異なる形式成分を同じ一つの「補語」成分として定義するのは適切かどうか、形式構造分析に関するもう一つの課題である。さらに、補語と解釈できる〈数量〉成分、〈着点〉成分、〈通過点〉成分、〈程度〉成分を含む文の形式構造には、上記の基本的構造様式のほかに、それぞれにはいくつかの変異形、つまり表層の形式構造がある。変異形間の関係、変異形の条件、及び変形のプロセスも課題となる。

この節では、理論的整合性、首尾一貫性の観点から、従来ではともに「補語」と呼ばれる形式成分のうち、〈事態〉成分に対応する「動詞性結果補語」、「可能補語」は形式構造上では「述語」であることと、本来の意味の「補語」成分は〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉、及び〈程度〉に対応する形式成分のみであることを明らかにする。また、〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉、〈程度〉に対応する本来の意味の「補語」成分については、それぞれが現れる構造的位置と統語範疇類型の情報に基づいて、「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」に区別して、これまで「補語成分」と呼ばれてきた要素を含む文の基本的構造を示す。あわせて、変異形の類型、基本的形式構造と変異形の関係、変異形の条件、及び変形のメカニズムとプロセスを明らかにする。

3.2 「動詞性結果補語」、「可能補語」：〈事態〉成分の実現である述語成分

これまでのなかで、V1+V2またはV1+得/不+V2の形で現れ、従来、「動詞性結果補語」、あるいは「可能補語」と呼ばれるV2は、形式構造上次のように、

V1のすぐ後に配置され、意味構造の主要成分である〈事態〉成分に対応する成分であることを述べた。

(29)

i. 「動詞性結果補語」

主語 + 状語 + V1+[V2]+目的語

我们 一定能 救 [活] 他

ii. 「可能補語」

主語 + V1+[DE/BU]+V2 + 目的語

我 拿 [得] 动 这个箱子

我 写 [不] 完 这篇论文。

形式構造上、事態成分に対応する形式成分は「述語」と定義される。従来の分析のなかでも、V1+V2のうち、V1が「述語」と定義されるのもまさにこのような理由に基づくものである。他方、事態成分以外の従属成分（〈動作者〉、〈対象〉、〈時〉、〈場所〉など）が実現する形式成分は、「述語」と区別して、それぞれ「主語」、「目的語」、「状語」などと定義される。このような意味において、従属成分である〈数量〉成分、〈着点〉成分、〈通過点〉成分、〈程度〉成分が実現する形式成分を「補語」として定義することが適切であるものの、事態成分が実現するV1を述語と定義する以上、同じ事態成分に対応するV2は述語ではなく、補語と定義されるのは、理論上矛盾である。理論的一貫性、整合性の観点から、V1+V2構文における事態成分に対応するV2も形式構造上述語、あるいは述語の一部であることは明らかである。V1とV2の間には一部「行為」事態と「結果」事態の相違が認められることは事実である。しかし、このような相違はあくまで述語動詞成分内部における事態類型表示の役割分担の相違であって、V2を従属成分の実現である他の補語成分とは同列に並べる理由にはならない。

以上の理由から、本稿はV1+V2構文の中のV2は「述語」の一部であると認める。従来、「動詞性結果補語」、「可能補語」と呼ばれるV2を含む構文の基本的形式構造は次のように表示される。

- (30) 主語 + 状語 + [述語] + 目的語
我们 一定能 救[活] 他
我 拿[得][动] 这个箱子
我 写[不][完] 这篇论文。

3.3 〈数量〉成分が実現する形式成分

3.3.1 構造的位置

(1) 述語動詞非反復式と述語動詞反復式

表層の形式として、〈数量〉成分を含む構文には「述語動詞非反復式」と「述語動詞反復式」の2つがある。前者の述語動詞非反復型はさらに〈数量〉成分と目的語の配置関係において、「〈数量〉+目的語」型と、「目的語+〈数量〉」型がある。

(31)

i. 述語動詞非反復式:

- a. 我学过〈三年〉汉语。 「〈数量〉+目的語」型
b. 小马等了 you 〈两个多小时〉。 「目的語+〈数量〉」型

ii. 述語動詞反復式:

我们找老师找过 〈两次〉。 「目的語+〈数量〉」型

以下、それぞれについてやや詳しく観察することにする。

(2) 述語動詞非反復式

i の「述語動詞非反復」型の2つの形式、すなわちaの「〈数量〉＋目的語」型とbの「目的語＋〈数量〉」型は、多くの場合、何等かの条件で交替が可能である。

- (32) a. 我们找过〈两次〉[老师]。
b. 我们找过[老师]〈两次〉。
- (33) a. 我陪〈一会儿〉[老师]。
b. 我陪[老师]〈一会儿〉。
- (34) a. 今天我去医院看了〈一次〉[他]。
b. 今天我去医院看了[他]〈一次〉。

ただし、次のように、aの「〈数量〉＋目的語」型のみが可能で、bの「目的語＋〈数量〉」型が不適格な例も数多い。

- (35) a. 我们学了〈三年〉[汉语]。
b. * 我们学了[汉语]〈三年〉。
- (36) a. 今天坐了〈三个小时〉[飞机]。
b. * 今天坐了[飞机]〈三个小时〉。

また、次のように、両方とも許容可能であるものの、相対的にbの「目的語＋〈数量〉」型のほうがより自然で、許容度が高いと思われる例も存在する。

- (37) a. ? 小王等了〈半个小时〉[你]。

b. 小王等了[你]〈半个小时〉。

(38) a. ? 我们找了〈半天〉[他]。

b. 我们找了[他]〈半天〉。

相対的に許容度が高いbの「目的語＋〈数量〉」型について、李1993は「賓語（目的語）が人称代名詞あるいは人を指す名詞であるとき、数量補語は賓語（目的語）の後に位置する」と述べ、目的語が「人」を指す名詞であることが「目的語＋〈数量〉」型が実現する条件であるとしている。上の各例はいずれも李1993の主張を支持するものである。ちなみに、劉・潘・故1983が挙げる次のような例のなかで目的語を担う「鬼子」、「老师」も、いわゆる「人名」、「指示代名詞」に準ずるものである。

(39) a. 他砍了[鬼子]〈一刀〉。

b. 我们找过[老师]〈三次〉。

このため、「目的語＋〈数量〉」実現の条件については更に厳密化、一般化する必要がある。

目的語と〈数量〉成分の位置は情報の新旧、重要度に関係すると思われる。福地1985によれば、一般的に、新情報と旧情報のうち、新情報の方が文の後の方に生じる傾向があるという。また、すべてが新情報、あるいはすべてが旧情報で、その間で重要度に差がある場合、より重要な情報を持つ部分が文の後部に生じるのが自然であるとされる。さらに、「人名」や「人称代名詞」が指す内容は「既知」の情報、つまり「旧情報」であることが一般的であるともいう。(Kirkwood1969, 福地1985)

中国語における上記のような〈数量〉成分と目的語の交替は、こうした情報的重要度の違い起因するものと思われる。先に示した事実で分かるように、中国語

では「〈数量〉成分＋目的語」の配列が一般的で、目的語が「人称代名詞」や「人を指す名詞」の場合のみ、「目的語＋〈数量〉成分」の配列が可能である。これは、「人名や人を指す名詞が指す内容が「既知」の情報、つまり「旧情報」であることが一般的である」という理由で説明される。つまり、目的語の意味内容が「人名」、または「人を指す名詞」であるときに、両者の位置が逆転して、「目的語（人名）＋〈数量〉成分」が許容され、あるいはより自然であるのは、「人名、人を指す名詞」自身の情報的重要度が低く、相対的に〈数量〉成分の重要度が増すことによって可能となるものと説明され、上記のような情報伝達の原則に則っているものと言える。従って、中国語で、〈数量〉成分を含む構文の基本的形式構造は「〈数量〉成分＋目的語」で、「目的語」＋〈数量〉の配置は変異形であると考えることができる。

なお、上掲劉・潘・故1983は次のような、必ずしも「人を指す名詞」ではない例も提示されていることに留意されたい。

(40) 小明踢了[狗]〈一脚〉就走开了。

(41) 阿金抓了[船帮]〈一把〉没抓住,又掉进水里去了。

この場合の数量詞は一般的な数量詞と異なり、「借用数量詞」とも劉・潘・故1983が述べている。「借用数量詞」とはなにかについての著者の説明はないが、提示された例からわかるように、この場合の数量詞は、「ちょっと、少し」などの意味合いが強く、従って、どちらかと言えば、形式的で、副詞的で、真正数量詞とは異なることが分かる。

以上の考察によって、〈数量〉成分を含む構文では、〈数量〉成分が述語と目的語の間にある次のような形式が〈数量〉成分を含む文の基本的形式構造であると考えられる。

(42) 主語＋状語＋述語＋〈数量〉＋目的語＋・・・

(3) 述語動詞反復式

〈数量〉成分を含む構文の基本的形式構造は次の例が示す「〈数量〉 + 目的語」形式であると述べた、

(43) 学了〈三年〉汉语。

(44) 坐了〈三个小时〉飞机。

先に述べた情報伝達の原則によれば、〈数量〉が新情報、あるいはより重要な情報である場合、文の後の方に置かれるよう求められる。他方、前の節で見たように、中国語では、「人名」や「人称代名詞」など、それ自身が旧情報を伝えるのに適しているもの以外が目的語を担う場合、位置の交替を許さず、〈数量〉成分と「目的語」の位置が交替した表現は不自然である。

(45) * 学了[汉语] 〈三年〉。

(46) * 坐了[飞机] 〈三个小时〉。

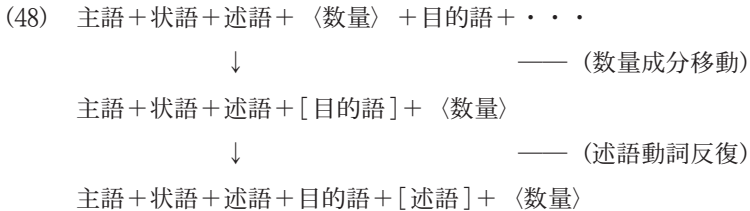
中国語では次のように、〈数量〉成分を文末に移動する場合、一度述語動詞の反復が義務付けられ、これによって「目的語」 + 〈数量〉が隣接した配置が避けられることが理由であると考えられる。こうして得られるのが〈数量〉成分を含む動詞反復文である。

(47) 学[汉语]学了 〈三年〉。

〈数量〉成分を含む文における述語動詞の反復は、〈数量〉成分が情報的に重要であることを示そうとすることによって動機づけられるものと考えられる。言い換えれば、〈数量〉成分が情報的により重要であるとき、情報伝達の原則から、文の後方に置くことが要求されるが、他方、形式構造上、一般名詞が目的語を担

う場合、「目的語」＋〈数量〉の配置が許されない。このため、目的語と〈数量〉成分の間に述語動詞を一度コピーして、反復させる。これによって、一方では情報伝達上の要求を満足させ、他方では形式構造上の制約を満足させることも可能となる。

よって、〈数量〉成分を含む文の述語動詞反復形は、基本的形式構造である「〈数量〉＋目的語型」の変異形で、〈数量〉成分の情動的評価によって動機づけられるものであると考える。その生成の過程を次のように示すことができる。



なお、目的語が「人名」、「人称代名詞」の場合も述語動詞反復形が可能であることを付け加えておく。

(49) 小王＋等＋[你]＋等了＋〈半个小时〉。

(50) 我们＋找＋[老师]＋找过＋〈三次〉。

例外として、〈数量〉成分を担う数量詞のうち、量詞が「借用量詞」（形式量詞、副詞的）の場合、次のように、述語動詞反復形が不可能であることを劉・潘・故1983が指摘している。

(51) * 陪老师陪了一会儿。

(52) * 砍鬼子砍了一刀。

これは、いわゆる「借用量詞」（形式量詞、副詞的）は真正量詞とは異なり、より重要な情報を担うことができないことが理由であると考える。

3.3.2 形式成分の類型

以上、〈数量〉成分を含む構文では、〈数量〉成分が述語動詞と目的語の間に置かれる形式が基本的形式構造であることを述べた。形式成分の類型として、述語動詞と目的語の間のこの位置は、従来「補語」と呼ばれてきたので、ここでもこれを踏襲して「補語」と呼ぶことができる。ただし、後述のように、基本的形式構造上、もう一つ「補語」と呼ばれ、目的語の後に置かれる成分がある。このため、二種類の「補語」を区別する必要性が生じる。両者の区別をはかって、ここではとりあえず〈数量〉成分が置かれる述語動詞と目的語の間の位置を「補語Ⅰ」と呼ぶことにする。よって、〈数量〉成分とそれが実現する形式成分について次のようにまとめることができる。つまり、述語動詞と目的語の間に形式成分が1つあり、その形式成分は「補語Ⅰ」である。基本的形式構造表示は次のように示すことができる。

- (53) 主語+狀語+述語+[補語 I]+目的語+... ——形式成分配列

3.3.3 統語範疇指定

意味構造において、〈数量〉成分を担う要素は数量詞である。形式構造において、〈数量〉成分は数量詞の形で実現する。従って、「補語Ⅰ」の統語範疇指定には少なくとも「数量詞」が含まれていることが分かる。基本的形式構造表示に統語範疇指定の情報を示すと、次のようになる。

- (54) 主語+状語+述語+[補語Ⅰ]+目的語+・・・——形式成分配列
 〈数量〉——対応する意味成分類型

3.3.4 〈数量〉成分を含む構文の基本的形式構造

以上、〈数量〉成分が現れる形式成分の類型を「補語Ⅰ」とした。数量成分は意味構造において数量詞成分によって担われ、表層の構文構造上でも数量詞のままで実現する。よって、形式成分配置、統語範疇指定、さらに対応する意味成分類型の情報を併記した「補語Ⅰ」を含む構文の基本的形式構造は、当面次のように示すことができる。

(55) 基本的形式構造表示：

主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋・・・	——形式成分配列
数量詞	——統語範疇類型指定
〈数量〉	——対応する意味成分類型

なお、前の節では表層の形式構造レベルにおいて、数量詞によって担われる〈数量〉成分は前後移動することがあることについて述べた。これらの事実をふまえて、〈数量〉成分を含む構文の表層形式構造が生成されるプロセスは次のように示される。

(56) 基本的形式構造表示：

主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋・・・	——形式成分配列
数量詞	——統語範疇類型指定
〈数量〉	——対応する意味成分類型

↓

表層形式構造：

- a. 主語＋状語＋述語＋〈数量〉＋目的語＋・・・
- b. 主語＋状語＋述語＋目的語＋〈数量〉
- c. 主語＋状語＋述語＋目的語＋述語＋〈数量〉

3.4 〈着点〉成分が実現する形式成分

3.4.1 構造的位置

標準的な形式構造における〈着点〉成分の位置は述語動詞と目的語の間である。

(57) 他们送[到了饭店]几个客人。

我放[在桌子上]一本书。

李四送[给张三]一本书。

また、〈着点〉成分を含む文はまた述語動詞反復として実現することもある。
この場合、〈着点〉成分は文末に配置される。

(58) 他们送客人一直送[到了饭店]。

(59) 我昨天看足球看[到了十二点]。

〈着点〉成分を含む文の動詞反復形の実現には次の2つの条件がある。一つは、〈着点〉成分が情報的に相対的に重要である時、もう1つは、〈着点〉を担う名詞成分が上の例のように、前置詞「到」を伴う場合に限られる。次の例のように、〈着点〉を担う名詞成分が前置詞「在」を伴う場合は、述語動詞反復形として実現することは不可能である。

(60) ? 放书放在桌子上。

(61) ? 送书送给了张三。

このことは次のことを意味する。つまり、〈着点〉はさらに「(1)物理的移動、または時間的推移の〈着点〉」に重心が置かれるものと、「(2)移動の結果、対象が存在する場所としての〈着点〉」に重心が置かれるものの違いがある。前者の場合は前置詞「到」が選ばれ、後者の場合は前置詞「在」、「给」が選ばれる。前

者の場合には述語動詞反復形が許され、後者の場合には述語動詞反復形が許されない。このため、〈着点〉成分を含む文にとって、述語動詞非反復形、〈着点〉成分が述語と目的語の間に置かれる形式が基本的形式構造で、述語動詞反復形は有標で、変異形であることが分かる。〈着点〉成分を含む文基本的形式構造は次の通りである。

(62) 主語＋状語＋述語＋〈着点〉＋目的語＋・・・

3.4.2 形式成分の類型

前記(62)の表示で分かるように、〈着点〉成分の位置は前節で述べた〈数量〉成分と同じで、述語動詞と目的語の間である。形式成分としてのこの位置をすでに「補語Ⅰ」と定義したので、〈着点〉成分は〈数量〉成分と同じく、「補語Ⅰ」に実現することがわかる。〈着点〉成分に関する情報を加えた基本的形式構造は次のように改められる。

(63) 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋・・・	——形式成分配列
数量詞	——統語範疇類型指定
〈数量〉	——対応する意味成分類型
〈着点〉	

3.4.3 統語範疇類型指定、

これまで見てきたように、形式成分の「補語Ⅰ」に対応する意味成分は〈分量〉と〈着点〉の二つがある。意味構造において、〈分量〉は数量詞性成分によって担われ、〈着点〉は名詞性成分によって担われる。他方、表層の形式構造では、数量詞によって担われる〈分量〉はそのままの形、すなわち「無標」の形で対応する形式成分の「補語Ⅰ」に現れるのに対して、名詞成分によって担われる〈着点〉が対応する同じ形式成分の「補語Ⅰ」に現れるときには前置詞を添加した前

置詞フレーズ形、すなわち「有標」の形で現れる。このため、表層の形式構造から見て、当該成分の統語範疇指定は「数量詞」か、「前置詞フレーズ」かの二つの選択肢があるように見える。

ここではまず、当該成分に名詞成分が置かれるときの前置詞について考える必要がある。

意味構造において、意味成分の意味役割はそれ自身の意味成分類型によって定められており、前置詞や助詞などの機能語によって表示する必要性が生じないことは言うまでもない。よって、前置詞や助詞などの機能語は意味構造表示に含まれる要素ではない。前置詞や助詞などの機能語は、表層の構文構造において、構文成分の類型（主語、述語、目的語など）、及びその意味役割を示すのに機能する要素である。従って、表層の構文構造上の要請によって、意味構造が形式構造に導入され、構文構造が実現する過程で添加されるものであると考える。

表層構文構造において、「補語 I」に添付される前置詞の「構文成分類型表示機能」とは次のようなことである。周知のように、述語動詞の後に置かれる形式成分には、「補語 I」のほかに、目的語がある。目的語に名詞成分が現れる時はそのままの形、すなわち「無標」の形で現れる。他方、同じく述語動詞の後に置かれる「補語 I」に名詞成分が現れる時は、ここまで見てきたように、前置詞の添加が要求され、すなわち「有標」の形で現れる。これによって、述語の後に置かれる無標の名詞成分は自動的に「目的語」として認識され、有標の名詞成分（すなわち前置詞＋名詞、あるいは前置詞フレーズ）は「補語 I」として認識されるわけである。このような仕組みは次のように示すことができよう。

(64) V+[前置詞＋名詞]＋名詞

述語	補語 I	目的語
放		桌子
放	在桌子上	一本书

もし「補語Ⅰ」に置かれる名詞成分も目的語に置かれる名詞成分と同様、無標のままであれば、「補語Ⅰ」と目的語の区別は語順以外に手段がなく、語彙項目によっては、両者が混同され、これによってそれぞれの意味役割の認識に支障を来すケースも予想される。次の二文では、a文よりも、b文のほうが形式成分類型の違いが明確に示され、よって、形式成分意味役割の認識、ないし文全体の意味も明確なはずである。

- (65) a. ? 他 放 桌子 一本书。
 b. 他 放 在桌子上 一本书。

次に、表層の構文構造において、「補語Ⅰ」に添付される前置詞の「意味役割表示機能」については次のように述べるができる。名詞成分によって担われる「補語Ⅰ」における前置詞はその名詞成分が担う下位意味役割が「場所」か、「相手」か、あるいは「到着点」かによって、「在」、「給」、「到」などのように、前置詞の類型が選択され、交替する。つまり、表層の構文構造において、まず前置詞の存在によって当該名詞成分の構文成分類型が「補語Ⅰ」であることが示され、さらに前置詞の類型が「在、給、到」の違いによって、当該構文成分が担う意味役割の下位類型が「場所」か、「受益者」か、「到達点」かが示されるようになっている。

このように、「補語Ⅰ」に添付されている前置詞は、意味構造にとって必要な要素ではなく、表層の構文構造において構文成分類型表記機能と意味役割表示機能を果たす要素である。このことはすなわち、表層の構文構造において、構文成分類型及び意味役割表示に関する制約があり、「補語Ⅰ」に添付される前置詞はこうした表層の構文構造の要請によって添加されるものであることを意味する。

他方、このような前置詞は、述語動詞に後続する名詞性成分のうちの「補語Ⅰ」にのみ添付され、また、その下位類型は当該成分の意味役割の下位類型によって選択されることは周知の通りである。言い換えれば、「補語Ⅰ」に前置詞が添付

されること、及び添付される前置詞の類型は、構文成分の類型、構文成分を担う要素の統語範疇類型、さらに当該構文成分の意味という三つの情報によって予測可能で、規則的である。予測できる要素である以上、深層の基本的形式構造に表示する必要もなく、意味構造上の意味成分が基本的形式構造に導入されたあと、規則に基づいて自動的に添付されるものであると考えるのが適切である。「補語 I」が数量詞によって担われる〈数量〉成分の場合と比較しながら、概念的にそれぞれ次のように示される。

(66) 〈数量〉成分と「補語 I」

主語 + 状語 + 述語 + [補語 I] + 目的語 + . . .	——形式成分配列
数量詞	——統語範疇類型指定
〈数量〉	——対応する意味成分類型
数量詞	——表層の構文成分形式

(67) 〈着点〉成分と「補語 I」

主語 + 状語 + 述語 + [補語 I] + 目的語 + . . .	——形式成分配置
名詞	——統語範疇類型指定
〈着点〉	——対応する意味成分類型
[前置詞] + 名詞	——表層の構文成分形式

なお、形式構造における前置詞添付規則は次のように述べられる。

(68) 変形規則 (前置詞添加)

- i. 「補語 I」に名詞成分が置かれる場合、その名詞成分に対して前置詞を添加すること。

- ii. 前置詞の類型は当該成分の下位意味類型によって選択すること。

蛇足だが、述語動詞に先行する「状語」に名詞成分が置かれる場合も同じように前置詞が要求されるのも、同じ理由によるものである。

よって、上記のような〈着点〉成分の事実に基づいて、基本的形式構造において、当該成分が実現する形式成分「補語 I」の統語範疇類型指定を「名詞」とすることができる。

3.4.4 〈着点〉成分を含む文の基本的形式構造表示：

前3.3節に示した「数量詞」によって担われるものに本節の〈着点〉に関する情報を加えて、深層の基本的形式構造表示は当面次のように改められる。(注：後に、前置詞添加の理由の説明によって、当該形式成分の統語範疇指定は「数量詞」に一本化される。3.6参照)

- | | |
|------------------------------|--------------|
| (69) 主語＋状語＋述語＋[補語 I]＋目的語＋・・・ | ——形式成分配列 |
| ①数量詞 | ——統語範疇指定 |
| ②名詞 | |
| 〈数量〉 | ——対応する意味成分類型 |
| 〈着点〉 | |

3.5 〈通過点〉成分が実現する形式成分

3.5.1 構造的位罫:

基本的形式構造における〈通過点〉の位置は〈数量〉、〈着点〉と同じで、述語動詞と目的語の間である。(ただし、次の(70-e)、(70-f)が示すように、〈通過点〉成分の後に助詞「来／去」が伴う場合、〈通過点〉成分が形式構造において顕現されないこともある。)

- b. 老师走出了[教室]。
- c. 他们抬到[楼上]一张桌子。
- d. 他拿下[楼]去几个杯子。
- e. 他从地上捡起[]来一张纸。
- f. 前面走过[]来一个人。

よって、基本的形式構造における〈通過点〉成分の構造的位置は次のように表示される。

- (71) 主語＋狀語＋述語＋〈通過点〉＋目的語＋．．．

3.5.2 形式成分の類型

上述のように、基本的形式構造における〈通過点〉成分の構造的位罫は〈数量〉成分、及び〈着点〉成分と同じ、述語成分と目的語の間、すなわちこれまで「補語Ⅰ」と定義される位罫である。よって、基本的構文構造表示における「補語Ⅰ」が対應する意味成分類型は、前述の〈数量〉、〈着点〉に、〈通過点〉が加わり、次のように表示される。

- (72) 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋．．． —形式成分配列
 〈数量〉 ————対応する意味成分類型
 〈着点〉
 〈通過点〉

3.5.3 統語範疇

意味構造において、〈通過点〉成分は名詞性成分によって担われる(73)。他方、表層の構文構造では同じ名詞成分によって担われる〈着点〉の場合と同様、〈通

過点) を担う名詞成分に前置詞が添付される形で現れる(74)。

- (73) 走 { 老师〈主体・動作者〉(主語)
教室〈参与体・通過点〉(補語 I)

(74) 老师+走+[出]教室。

従って、表層の構文構造において〈通過点〉成分に添付される前置詞の添加及びその類型についても、〈着点〉成分の場合と同様、当該成分が実現する形式成分類型(「補語 I」)と、これを担う要素の統語範疇類型(「名詞」)、及び当該成分の下位意味類型という三つの情報によって予測できる。このため、深層の基本的構造形式においては前置詞に関する情報を表示する必要はなく、〈着点〉成分の場合と同様、(68)に提示した表層の形式構造における前置詞添加に関する変形規則と同じ規則で述べられる。よって、基本的形式構造における当該成分が実現する形式成分である「補語 I」の統語範疇類型指定も〈着点〉成分の場合と同様、「名詞」となる。

3.5.4 〈通過点〉成分を含む構文の基本的形式構造

〈通過点〉成分が対応する形式成分類型として、〈数量〉や〈着点〉成分が対応する形式成分類型と同じなので、〈通過点〉を含む深層の基本的形式構造における形式成分配列は前節(72)に示したものと同じである。参照の便宜上、統語範疇類型の情報を加えて、下に再録しておく。

- (75) 主語+状語+述語+[補語 I]+目的語+・・・ —形式成分配列
①数量詞 —統語範疇指定
②名詞
〈数量〉 ——対応する意味成分類型

〈着点〉

〈通過点〉

3.6 〈程度〉成分が実現する形式成分

3.6.1 構造的位置

表層の構文構造形式では、〈程度〉成分は述語動詞の反復と、助詞「得」の添加を伴い、次のように、目的語よりさらに後の文末の位置に置かれる。

(76) 主語＋状語＋述語＋目的語＋述語＋[DE]＋〈程度〉

小明 写 字 写 得 〈笔尖都秃了〉。

小明 打 球 打 得 〈很累〉。

〈程度〉成分を含む文は上記の述語動詞反復形以外に変異形は存在せず、次のように、〈程度〉成分を「補語Ⅰ」（述語と目的語の間）の位置に配置する形式は不適格である。

(77) 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋・・・

*小明 写 〈笔尖都秃了〉 字。

*小明 打 〈很累〉 球。

従って、「目的語＋・・・＋〈程度〉」の位置関係は〈程度〉成分を含む文の基本的形式構造に関する規定の一つであると考ええる。また、〈程度〉成分が文末に置かれる故、目的語との位置関係でとらえる場合、「目的語＋・・・＋〈程度〉」の配列となる。この点、次に示すように、これまで観察してきた〈数量〉成分、〈着点〉成分は基本的形式構造においていずれも述語と目的語の間に置かれているのと対照的である。また、述語動詞の反復と助詞「得」の添加が義務的である点に関しても、他の構文の基本的形式構造と大きく異なる点も注目される。

- (78) 数量成分：述語＋〈数量〉＋[目的語]
 (79) 着点成分：述語＋〈着点〉＋[目的語]
 (80) 程度成分：述語＋[目的語]＋述語＋[得]＋〈程度〉

以上はあくまで表層の構文形式における〈程度〉成分が現れる構造的位置について観察したが、以下の節の議論で分かるように、〈程度〉成分を含む構文の表層構文構造形式に関し、抽象化できる余地が残っている。以下の節で別途議論することにする。

3.6.2 統語範疇指定

〈程度〉成分を担う要素の統語範疇は「状態」を表す動詞性フレーズで、「N＋V」、または「V」である。これらの特徴については以下の例で確認できる。

- (81) 〈程度〉＝N＋V
 a. 小明＋写＋字＋写＋得＋〈笔尖＋都秃了〉。
 b. 他＋打＋球＋打＋得＋〈(他)＋很累〉。
- (82) 〈程度〉＝V
 a. 他＋洗＋衣服＋洗＋得＋〈很干净〉。
 b. 他＋写＋字＋写＋得＋〈很快〉。

表層の形式構造において、〈程度〉成分がN＋Vの形で実現するか、Vの形で実現するかは、意味成分自身に名詞成分Nが含まれているか否かの事実と、同じ文中に同一指示成分が含まれているか否かという二つ要因によって決まる。含まれていない場合、表層の形式構造上N＋VのなかのNが結果的に「空欄」となり、同一指示成分の場合は、同一指示関係にある成分の一方が消去されるので、表層構造上Nが不在となる。いずれにしても、基本的形式構造自身の違いではないの

で、基本的形式構造において、〈程度〉成分に対応する形式成分の統語範疇指定は動詞性フレーズで、「N + V」である。

3.6.3. 〈程度〉成分を含む構文の基本的形式構造

以上、表層の構文構造形式レベルでは、〈程度〉成分は述語動詞の反復、助詞「得」の添加とともに目的語のさらに後に置かれることを見た。ここでは、述語動詞反復と助詞「得」の添加について検討を加え、〈程度〉成分を含む構文の基本的形式構造について再考することにする。

(1) 述語動詞の反復

動詞の反復は〈程度〉成分を含む構文だけに見られる現象ではなく、これまで見てきた〈数量〉成分を含む構文の事実と、〈着点〉成分を含む構文の事実からも確認できる。

- (83) a. 我光[办]手续就[办了][半年]。(我办了[半年]手续。) 〈数量〉
b. 他们送客人一直送[到了饭店]。(他们送[到了饭店]几个客人。) 〈着点〉
c. 他[读]研究生[读]得[很苦]。 〈程度〉

上記の事実からわかるように、「目的語の後の位置にさらに形式成分が存在する場合、(あるいは移動によって、目的語の後の位置に形式成分が現れる場合)、規則的にその形式成分(「補語Ⅱ」)の前に述語動詞をコピーし、反復させる」として、一般的な規則として述べることができる。このため、この場合の述語動詞反復は「目的語成分の後にさらに形式成分が存在するか否か」という条件によって予測可能な要素である。予測できる要素である以上、基本的形式構造にとって余剰的で、表示すべき要素ではなく、変形規則で述べられる知識である。従って、〈程度〉を含む文に関して、次の(84)のように、述語動詞の反復を伴わない形式を基本的形式構造とすることができ、また、述語動詞反復規則は次のように述べられる。(変形のプロセスについては(89)参照)

(84) 主語＋状語＋述語＋補語Ⅰ＋目的語＋〈程度〉

(85) 変形規則：述語動詞反復

目的語成分の後の成分に対して、その前に述語動詞をコピーすること。

(2) 「得」の添加

他方、目的語よりさらに後に位置に置かれる形式成分に関して、助詞「得」はこの節の対象である〈程度〉成分にのみ添加されることは、上の例(83)が示している。

同じように述語動詞の反復が行われていながら、「得」が添加されない〈数量〉、〈着点〉成分に比べて、〈程度〉成分動詞性フレーズによって担われている点で異なる。従って、「得」の添加は「補語Ⅱ」の統語範疇類型と関係することが分かる。つまり、目的語よりさらに後に位置に置かれる形式成分のうち、動詞フレーズによって担われるものの前にのみ「得」が添加される、ということである。よって、述語動詞の反復と同様、「得」の添加も「目的語に後続する形式成分」と、「当該成分が動詞性フレーズによって担われる」という二つの情報を手がかりに予測可能である。従って、助詞「得」も基本的形式構造表示に含まれる要素ではなく、基本的形式構造に対して適用される変形規則によって与えられるとすることができる。よって、基本的形式構造は(84)のままとして、「得」添加に関する変形規則は次のように述べられる。

(86) 変形規則（助詞「得」添加）

目的語成分の後の動詞性フレーズに対して、その前に助詞「得」を添加すること。

3.6.4 基本的形式構造

以上述べた理由によって、〈程度〉成分を含む構文の基本的形式構造は上の

(84)に示した通りで((87)に再録)、上記(85)、(86)の変形規則に従って述語動詞反復及び助詞「得」添加の操作を経て、表層の構文構造形式を得るプロセスと実例は次の(88)、(89)に示す。

(87) 主語＋状語＋述語＋補語 I＋目的語＋〈程度〉

(88) 主語＋状語＋述語＋補語 I＋目的語＋〈程度〉

↓

①主語＋状語＋述語＋補語 I＋目的語＋[述語]＋〈程度〉

②主語＋状語＋述語＋補語 I＋目的語＋[述語]＋[DE]＋〈程度〉

(89) i. 基本的形式構造

主語＋状語＋述語＋目的語＋〈程度〉

小明 写 字 〈笔尖都秃了〉。

↓

変形(述語動詞反復規則、助詞「得」添加規則)

i. 小明＋写＋字＋[写]＋〈笔尖都秃了〉。

ii. 小明＋写＋字＋[写]＋[得]＋〈笔尖都秃了〉。

なお、述語動詞反復、及び助詞「得」の機能は、「補語 I」における前置詞添加と同様、形式構造上における形式成分類型表示にあると考え、形式構造上の制約、規定によるものであると考える。紙幅の関係で、本稿での議論を割愛し、他の機会に期待されたい。

3.6.5 形式成分の類型

ここで、目的語成分の後に位置し、動詞性フレーズ成分によって担われる〈程度〉成分を具現する形式成分類型が次の課題となる。中国語の基本的形式構造において、述語動詞の後に「補語 I」と「目的語」の2つの形式成分があることは

(90) 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋．．．

(91) 主語＋状語＋述語＋補語Ⅰ＋目的語＋〈程度〉

(92) 主語＋状語＋述語＋〔補語Ⅰ〕＋目的語＋〔補語Ⅱ〕 ——形式成分配列
動詞性フレーズ ——統語範疇類型指定
〈程度〉 ——対応する意味成分類型

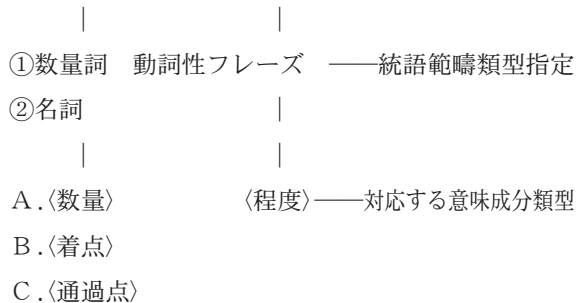
(43)

計三つがあることが分かる。

(93) A. 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋[補語Ⅱ]

形式成分は「構造的位置」、「統語範疇類型指定」の2つの情報から定義され、加えて、意味構造の記載する内容ではあるが、「対応する意味成分類型」も規定されているので、二種類の補語成分を含む文の基本的形式構造表示及び対応する意味成分類型の情報はそれぞれ次のように表示される。

(94) A. 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋[補語Ⅱ] ——形式成分配列



なお、「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」が共起する文として、次のような例を示すことができる。

(95) 他一连打了[一个多小时太极拳]打得[他腿都酸]了。

補語Ⅰ

補語Ⅱ

3.7.2 「補語Ⅰ」の統語範疇類型指定について

ここまでは、「補語Ⅰ」の統語範疇類型指定について、①数量詞、②名詞の二種類があるとしてきた(75)。数量詞成分はそのままの形で現れるのに対して、名

詞性成分には前置詞が要求される事実から、当該形式成分の統語範疇指定はさらに抽象化する余地が残っていることが考えられる。

「補語Ⅰ」に現れる数量詞成分と名詞成分のうち、数量詞成分はそのままの形、すなわち「無標」の形で、名詞成分は前置詞を添付した前置詞フレーズの形、すなわち「有標」の形で現れることを見た。無標とはすなわち当該形式成分にとって一般的で、本来の現れるべき要素で、故にそのままの形で現れることを意味する。有標とは非一般的、本来、当該位置に現れる要素ではなく、故に本来の形を変えて、前置詞を添付した形にして初めて当該成分に置かれることが可能であることを意味する。このような意味において、「補語Ⅰ」に現れる名詞性成分に対する前置詞添付の操作は、名詞性成分の非名詞化操作であるともいえる。

また、前置詞は名詞成分にのみ添付されるので、前置詞の添付は「補語Ⅰ」、「名詞性成分」という二つの情報から予測することが可能である。

以上述べた二つの理由によって、「補語Ⅰ」という形式成分は本来は数量詞の統語範疇指定を受ける形式成分であることが分かる。よって当該形式成分に関する統語範疇指定は〈数量詞〉であると考ええる。「補語Ⅰ」に関する形式構造記述は次の二つの内容からなる。

(96) i. 基本的形式構造表示（深層構造表示）

主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋補語Ⅱ
数量詞

ii. 変形（前置詞添加）規則：

「補語Ⅰ」に名詞成分（〈着点〉）が置かれる時には、その名詞成分に対して、当該成分の下位意味役割に合致した前置詞を添加すること。

4. まとめ：補語構文構築のプロセス

これまでの三節のなかで、第2節では、従来「補語成分」と呼ばれる要素を意

味構造上の〈事態成分〉に対応する「述語」成分と、従属成分の〈着点〉、〈数量〉、〈通過点〉、〈程度〉に対応する本来の意味の「補語」成分に区別し、上記諸意味成分のそれぞれを含む構文の意味構造を分析し、示した。第3節では、従属成分である〈着点〉、〈数量〉、〈通過点〉、〈程度〉のそれぞれが実現する形式成分の構造的位置と統語範疇類型指定を分析し、これら4成分が実現する形式構造には「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」の違いがあることを明らかにしたうえで、上記諸成分が実現する基本的形式構造を示すに至った。あわせて、意味構造が形式構造へ導入され、基本的構文構造が得られる過程と、さらに、形式構造上の（形式成分類型表示、意味役割表示、及び同一指示成分関係といった）制約や、語用論的要請などによって、基本的構文構造では成分の移動、消去、機能語の添加などの変形が起り、基本的構文構造から表層の構文構造が得られる過程も見た。この節では、これまで述べてきたことを整理し、上記諸成分が対応する「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」を含む構文が構築されるメカニズムとプロセスを示す。

4.1 基本的形式構造表示

深層の表示レベルにおいて、中国語の基本的形式構造における形式成分配列パターンは次に示す一つだけである。

(97) 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋[補語Ⅱ]

形式成分は上記の配列に関する情報のほかに、統語範疇指定に関する情報も記載されている。本稿の対象である「補語Ⅰ」と「補語Ⅱ」の統語範疇指定に関する情報を示すと、次のようになる。

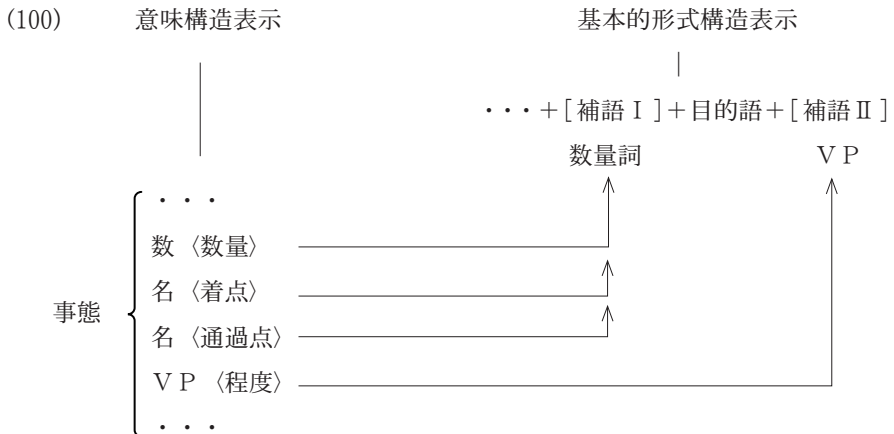
(98) 主語+状語+述語+[補語Ⅰ]+目的語+[補語Ⅱ] ——形式成分配列
数量詞 動詞性フレーズ——統語範疇類型指定

さらに、意味構造の記載の内容ではあるが、形式成分には意味成分との対応関係も定められている、参考情報として表示すると、次のようになる。

- (99) 主語＋状語＋述語＋[補語Ⅰ]＋目的語＋[補語Ⅱ] ——形式成分配列
- 数量詞 動詞性フレーズ——統語範疇類型指定
- 〈数量〉 〈程度〉 ——対応する意味成分類型
- 〈着点〉
- 〈通過点〉

4.2 基本的構文構造の実現

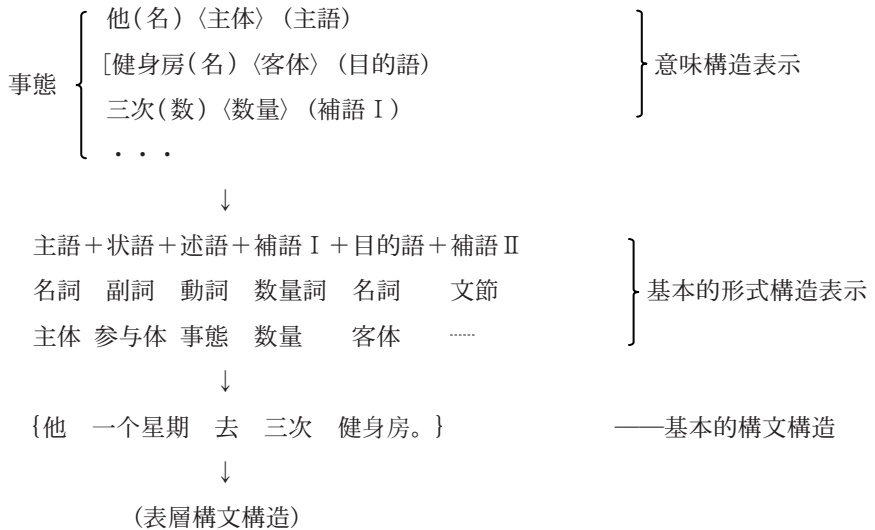
意味構造上の意味成分が意味成分類型と形式成分類型との対応関係に基づいて形式構造上の形式成分に導入され、基本的構文構造が得られる。〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉、及び〈程度〉成分を含む文の意味構造は第2節で示した。こうした意味構造が形式構造に導入されて、基本的構文構造が得られる過程は概念的に次のように示すことができる。



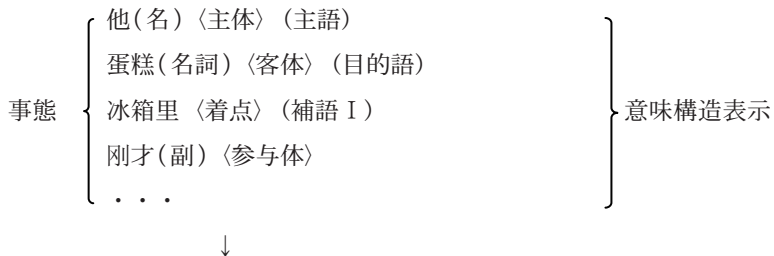
また、〈数量〉、〈着点〉、〈通過点〉、及び〈程度〉成分が形式成分のそれぞれを含む基本的構文構造が実現する過程は次のように示される。

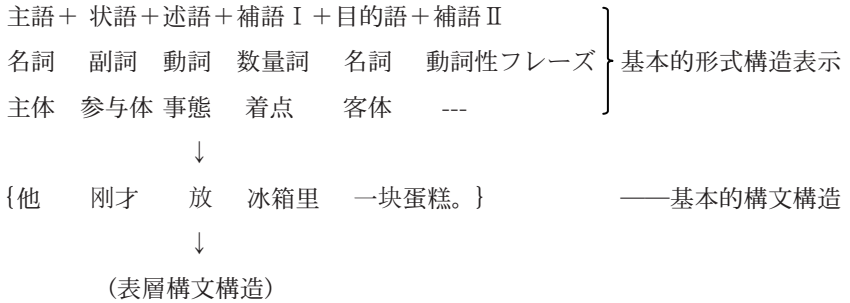
(101)

i. 〈数量〉成分を含む構文の意味構造

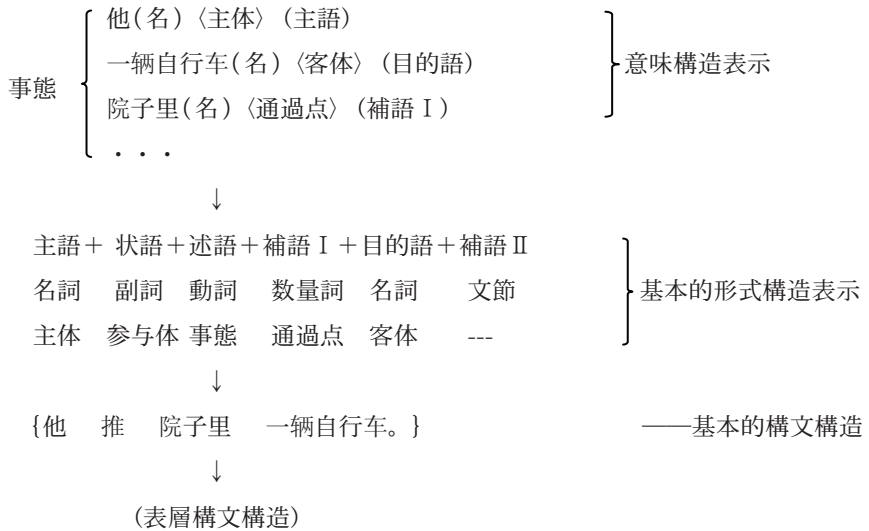


ii. 〈着点〉成分を含む構文の意味構造

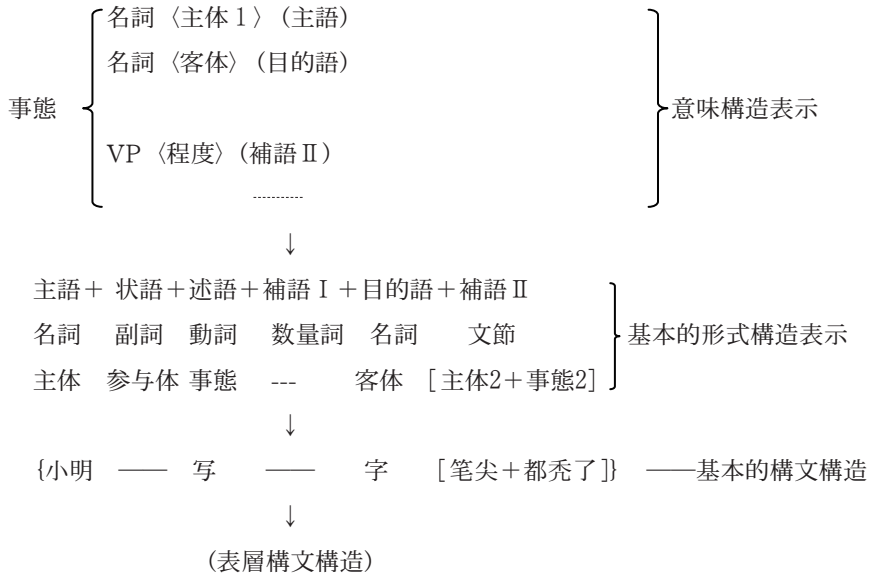




iii. 〈通過点〉を含む構文の意味構造



iv. 〈程度〉成分を含む構文の意味構造



4.3. 変形、表層の構文構造の実現

深層の基本的構文構造はそのままの形で表層の構文構造として実現することもある。従って、基本的構文構造と表層の構文構造の間に変形の過程があり、変形は「変形規則」適用の結果として説明される。また、変形規則には義務的に適用されるものと、任意的に適用されるものがある。

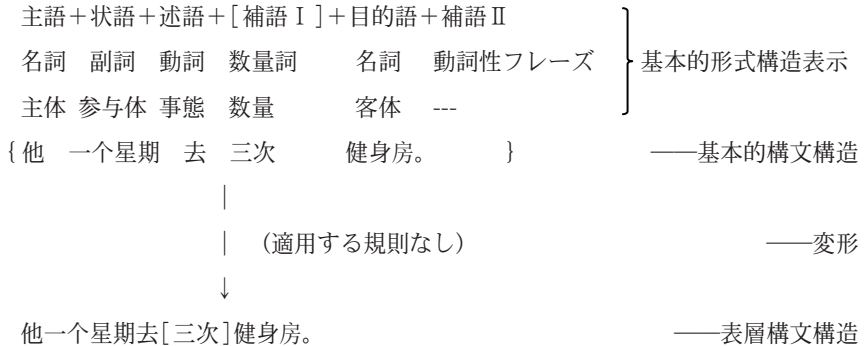
(1) 義務的に適用される変形規則

前置詞添加、〈程度〉成分を含む「補語 II」構文における述語動詞反復と助詞「得」の添加は、義務的に適用される変形規則である。

まず、〈数量〉成分が実現する「補語 I」を含む構文の表層構文構造では、〈数

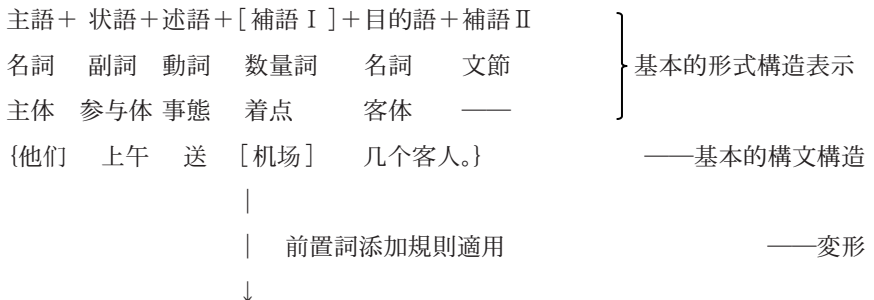
量〉成分を担う数量詞はそのままの形で「補語Ⅰ」として実現するので、義務的に適用される変形規則はなく、基本的構文構造はそのまま表層の構文構造として実現する。

(102) 〈数量〉



他方、〈着点〉成分と〈通過点〉成分が実現する「補語Ⅰ」を含む表層構文構造では、本来、名詞成分によって担われているこれらの成分に前置詞が添付される形で現れる。従って、次のように、前置詞添加規則が義務的に適用されることが分かる。（「前置詞」添加規則については(68)、(96)参照。）

(103) 〈着点〉



他们上午送[到]机场 几个客人。

——表層構文構造

(104) 〈通過点〉

主語 + 状語 + 述語 + [補語 I] + 目的語 + 補語 II

名詞 副詞 動詞 数量詞 名詞 文節

主体 参与体 事態 通過点 客体 ——

基本的形式構造表示

他 推 院子里 一辆自行车。

——基本的構文構造

|

|

前置詞添加規則適用

——変形

↓

他 推 [进] 院子里 一辆自行车。

——表層構文構造

〈程度〉成分が実現する「補語 II」を含む構文では、基本的構文構造に対して、表層の構文構造では唯一「述語動詞の反復」と助詞「得」の添加を伴う形で実現する。よって、〈程度〉成分が実現する「補語 II」を含む構文における「述語動詞の反復」と助詞「得」添加規則の適用は義務的である。（「述語動詞の反復」と助詞「得」添加規則についてはそれぞれ(85)、(86)参照。）

(105) 〈程度〉

主語 + 状語 + 述語 + 補語 I + 目的語 + [補語 II]

名詞 副詞 動詞 数量詞 名詞 文節

主体 参与体 事態 客体 程度

基本的形式構造表示

↓

{小明 写 字 [笔尖 + 都秃了]}

——基本的構文構造

|

|

述語動詞反復規則適用

——変形

|

「得」添加規則適用

——変形



小明写字[写][得]笔尖都秃了。

——表層構文構造

(2) 任意的に適用される変形規則

〈数量〉成分、〈着点〉成分の文末（目的語より後）への移動は、語用論的要因によって誘発されるものと思われる。どちらかと言えば任意的である。また、これらの成分の移動に伴って、述語動詞の反復が生じることもあるが、〈数量〉成分に関しては、述語動詞の反復が任意的だが、〈着点〉成分に関しては、述語動詞の反復は義務的なようである。

- (106) a. 他去过[三次]北京。
 b. 他去过北京[三次]。
 c. 他去北京[去]过[三次]。
- (107) a. 他们送到了[机场]几个客人。
 b. ?? 他们送了几个客人到[机场]。
 c. 他们送客人一直送到了[机场]。

なお、〈通過点〉の文末移動も、理論的には可能であるように思われるが、現時点ではその事実はまだ十分明確に確認されていない。今後の研究に期待する。

(3) 同一指示成分消去

文中に同一指示関係にある名詞成分が含まれるとき、その一方の消去が可能である。ただし、強制性の強いものとそうでないものがあるようである。また、消去は順行で行われることも、逆行で行われることも可能である。

- (108) a. 今天[他]打球打得很累。
 b. 今天打球打得[他]很累。

c. 今天[他]打球打得[他]很累。

(109) a. 他洗[衣服]洗得很干净。

b. ? 他洗[衣服]洗得[衣服]很干净。

c. ? 他洗得[衣服]很干净。

(110) a. 小明打球打得[小明很累]。

b. 小明打球打得[--很累]

c. [--]打球打得小明很累。

【謝辞】本論文の刊行に際し、査読者の方からは重要で、有益なご指摘とご助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。本論文に不備がある場合、その責任はすべて筆者自身に帰するものである。

(注)

1* 述語後位に置かれる「在+N」、「給+N」、及び「到+N」、さらに「进+N」のような要素の構造分析について、現在大きく二つの考え方がある。一つは、「在、給、到」を「前置詞」とする考え方である。このような立場にあるのは、趙1980と、劉・潘・胡2001がある。また、荒川2003は明言を避けているが、「在、給」に関しては、「在+N」、「給+N」全体を「補語」、つまり一つの構成素単位と見なしているので、事実上前置詞的要素として捉えていることになる。このような考え方に従えば、構造分析は次の(1)のようになる。

(1) a. 张三 | 放 | 在・桌子上 | 一本书 |。

b. 张三 | 送 | 给・李四 | 一个礼物 |。

c. 李四 | 推 | 到・院子里 | 一辆自行车 |。

もう一つは、「在、給、到」を「動詞」（または動詞の一部、あるいは「補助動詞」）とする

考え方である（林濤1990、杉村1994）。後者の考え方に従うと、構造分析は次の(2)のようになる。

- (2) a. | 张三 | 放・在 | 桌子上 | 一本书 |。
 b. | 张三 | 送・给 | 李四 | 一个礼物 |。
 c. | 李四 | 推・到 | 院子里 | 一辆自行车 |。

本稿は趙1980と同じ立場に立ち、当該位置に置かれる「到、给、在」を「前置詞的要素」とし、さらに、趙氏が挙げる「到、给、在」に加えて、「进、上、下」なども同じ性格の要素であるとする。その主な理由は、これらの要素の生起も移動も、形式上後続する名詞成分との共起が要求されことと、その類型も後続する名詞成分の意味内容によって選択される点である。もちろん、前置詞として定義するには、いわゆる完成助詞「了」の位置の説明、さらに、例えば「进、上、下」を含む文のように「他推进来一辆自行车」、「他们抬上来一张桌子」、「他搬下去一个椅子。」のように、共起すべき名詞成分が顕現されないことがあることなど、いくつかの課題はあるが、これらの課題は当該成分がもともとは動詞から変化してきた歴史的経緯や、「了」自身の構造的位置の解釈、さらに「来、去」との共起関係から生じる意味的余剰性に起因する「省略」などの側面から説明できる問題と考える。これらの問題の説明には相当の紙幅必要であることが予想され、また、本稿の主旨からは若干離れている問題でもあるため、ここではその詳細については割愛することとし、他の機会に譲ることにする。

2* 古代中国語がかつて豊富にあった使役動詞の例として、次のようなものを挙げることができる（程楠2013）。

- (1) 尝人，人死。食狗，狗死。（《吕氏春秋・上德》）
 (2) 花草之流，可以悦目。（《齐民要术》）
 (3) 既来之，则安之。（《论语・季氏》）
 (4) 乘势，则哀公臣仲尼。（《韩非子・五蠹》）

3* 上記*1で述べたように、「他们抬上楼来一张桌子。」,「他们推进院子里来一辆自行车。」のなかの「楼」,「院子里」の意味役割は〈着点〉で、形式成分としては「補語」である。「上」、「进」は前置詞で、予測可能で、表層構造で添加される。趨向動詞は「～来」、「～去」に限定される。ただし、補語は「来」、「去」を条件に、非顕現可能である。

引用文献

北京大学中文系1993:『現代漢語』商務印書館

程楠2013:「現代漢語の使動義和使動形式」修士論文(未公刊) 熊本学園大学大学院

李臨定1993:『中国語文法概論』宮田一郎 訳 光生館

林涛1962:「現代漢語輕音和句法結構的關係」《中国語文》1962年7月号

劉月華・潘文娛・故韓1983:『實用現代漢語語法』外語教學與研究出版社

錢乃榮 他1995:『現代漢語語言學』北京語言學院出版社

趙元任1980:《中國話的文法》丁邦新 譯 香港中文大學出版社

杉村博文1994:『中国語文法教室』大修館書店

福地肇1985:『新英文法選書10 談話の構造』大修館書店

Kirkwood, H. W. 1969. "Aspect of word order and its communicative function in English and German." JL 5.1, 85-107

概 要

传统汉语研究把汉语的句子直接构成成份分析为“主语、谓语、宾语、状语、补语”5个成份。其中的“补语”成份是一个相对模糊的概念。“补语”有时出现在宾语前面，有时出现在宾语后面。意义上，前者对应“数量”和“终点”，后者对应“程度”。前者基本上由数量词承当，（由名词成份充当时需要添加一个介词）。后者基本上由动词性短语充当。两者的结构位置、语义功能、品词类型均不相同。这样的分析事实上是把谓语成份后无法解释为宾语的成份都笼统地归纳为“补语”的结果。这样的分析既没有正确地反映语言的表面事实，更无法合理地解释语言使用者内在的句子生成机制。本文认为，汉语句子中谓语以后的成份中除了宾语以外还有两个形式成份，一个可以称作“补语Ⅰ”，一个可以称作“补语Ⅱ”。补语Ⅰ位于宾语前，补语Ⅱ位于宾语后。补语Ⅰ对应“数量”和“终点”，对应数量时由数量词充当，对应“终点”时由名词充当，表层形式上添加介词。补语Ⅱ对应“程度”，由动词性短语充当。表层形式上重复谓语动词，并添加介词“得”。谓语动词的重复与该成份的结构位置有关，助词“得”的添加与该成份的品词类型有关。